地質ニュース467号，6頁，1993年7月
Chishitsu News no. 467, p. 6, July, 1993

トルコ特集号にあたって

佐藤壮郎[1)]

トルコは大方の日本人にとって，何となく愛着を感じる国である．歴史ではヒッタイト文明やオスマントルコ帝国について必ず習うし，最近ではカッパドキアの遺跡が有名になった．音楽には有名な「トルコ行進曲」があるし，そういえば「とんでイスタンブール」という歌もあった．かつては，「トルコ風呂」が本来の意味をはき違えて一世を風靡した．

一方トルコ人の多くも日本びいきである．そのきっかけとなったのは，日露戦争での日本の勝利である．トルコは，オスマン帝国時代にヨーロッパ諸国の干渉に苦しみ，特にロシアとは長年にわたり抗争をつづけた．そのような国にとって，東洋の一小国がロシアのバルチック艦隊を破り，当時のヨーロッパの大国を打敗したことはまことに溜飲の下がる快事であったことだろう．連合艦隊司令長官の東郷元帥の名前は今でも有名で，アンカラの街でも「トーゴー」という名前をつけた店が時おりみかけられる．

ところが，トルコについて正確な知識をもっている人は意外に少ない．地質や資源については尚更である．たまたま昨年秋に，筆者が金属鉱業事業団主催のセミナーの講師としてトルコを訪問した折，藤井紀之氏との間でぜひ地質ニュースでトルコ特集号を出そうという話になり，トルコ駐箚の山口洋一大使(前金属鉱業事業団理事)にもご賛同をいただいた．テーマの構成は藤井氏にお願いし，地質・鉱床の紹介についてはトルコの鉱物資源調査総局(MTA)の専門家に依頼し，日本側には最近の研究協力の成果をまとめてもらうよう企画した．残念ながら紙面の都合で，本号ではまず前半の「トルコの地質と地下資源」を特集した．日本側の協力成果については次号以降に順次掲載するので併せてご覧いただきたい．

さて，藤井氏が書いておられるように，MTAと地質調査所との間には28年間にわたって技術協力が続けられている．その間，お互いの信頼関係が継続し，双方ともに満足すべき成果を生み出し続けていることは驚嘆に値する．

写真1　ギョズレル総裁と懇談する筆者（金属鉱業事業団セミナーで訪土した時）

最近地質調査所では，先進国・開発途上国を問わず，国際的な研究・技術協力プロジェクトが急激に増大しているが，その中には相手国の要求と日本側の希望が一致していないために，お互いに欲求不満におちいっている例が少なからず見られる．とくに途上国の場合には，先端的な研究機器や技術を性急に求める相手側と海外のフィールドで充分な研究をしたいと望む日本側の研究者の調整が，いつも頭痛の種となっている．

その点トルコの場合は，両者のマッチングが非常にうまくいった例であろう．逆にいえばそれなくしては，両国の協力関係は長続きしなかったに違いない．トルコでは今や伝説的存在にすらなっている故沢　俊明元所長が，わが国の最新の黒鉱探査理論をひっさげて黒海沿岸の鉱床探査を指導しておられた時には，恐らく沢元所長ご自身も，日本とは時代も環境も違う古い島弧の中に，黒鉱鉱床を発見することに熱い情熱を感じておられたことであろう．また，最近の北アナトリア断層の協力調査の場合でも，わが国で発展した活断層調査技術の移転と研究者の研究意欲とが，車の両輪となってうまく回転している好例である．

そのような意味で，この特集号が日・土両国の友好を深めるとともに，国際研究・技術協力のあり方を考える一助となれば，特集号をつくることを提案した一人としてこの上の幸はない．

1) 地質調査所　次長